

# 松山で症状伝わらず

## 米機関では調査に利用

「モルモットのようにでしたね。随分ばかにしていると悲しかった」。

梶野清子(94)＝松山市＝は

30歳ごろ、米国が当時、広島市で運営していた原爆傷害調査委員会

(ABC)の研究施設を訪ねた。被ばくした自分の体は将来どうな

ってしまふのかと不安だった清子は、

わらをもつかむような思いで施設に足を運んだが、そこは思っ

ていたような「病院」ではなかった。

1949年ごろ、夫の郷里の松山市に移住してからも、清子は原因不明の症状に苦しんだ。脱毛な

どは治まっていたが、体が重い。数時間動いただけで疲れ切り、そ

の日は横になって休まなければならなかった。

被爆者がほとんどいない松山市の病院では、症状を訴えてもなか

なか伝わらない。更年期のような症状を20代後半で訴えるのは「お

かしい」と言われ、精神疾患と誤診されたこともあった。

「いい病院ができていくから、行って診てもらったら」。

ある医国人に裸になるよう指示され、ガウンだけ与えられ、エックス線検査などを受けた。問診を受けた記

載

設の前に立つと、かまぼこのような形の建物が並び、病院とはどこか雰囲気が違うように感じる。

外

国に裸になるよう指示され、ガウンだけ与えられ、エックス線検査などを受けた。問診を受けた記

載

憶はない。検査が終わると、症状の説明や助言もなく、帰らされた。広島市立大広島平和研究所の高橋博子講師によると、冷戦下にあった米国は、軍事目的で人体への被ばくの影響を調査するため、ABCを設置した。核エネルギーの産業利用を進める狙いもあった。被爆者の遺体を解剖し、臓器などの標本を米軍病理学研究所に送り、放射線の研究を行った。その中には、親が被爆者で、生後すぐに亡くなった新生児や死産児も含まれる。占領下で協力した医師や助産師がABCに死亡を通報していた。

「被爆者を利用して。なんて残酷なんかなと感じましたよ。なぜ(敬称略、中田佐知子、高田未来)

日本人はこんなことを許すのかと。清子は表情を曇らせる。ABCの調査は長年、被爆者から「人体実験」と批判された。連合軍の占領期、被爆者はまともな治療を受けられず、情報統制によって国民は被害の実態を知ら

ない松山市で、清子はしばらくの間、深い疎外感を感じていた。近くを歩いただけで「被ばくがうつる」と言わんばかりに女性がエプロンで顔を押しさえて、家に駆け込んでいく。「生きていることがこんなにうれしいものとは、思っていました」

「被爆者を利用して。なんて残酷なんかなと感じましたよ。なぜ(敬称略、中田佐知子、高田未来)

## 占領末期やっと公表

米国は1947年に広島で、48年には長崎で、放射線の影響を調べる原爆傷害調査委員会(ABC)を発足させた。

広島市立大広島平和研究所講師の高橋博子氏によると、被爆者の救済対象ではなく研究対象と見なした。研究成果を初めて公表したのは占領末期の51年12月。放射

能による白血病への影響を認める中間発表で、高橋氏は「地元学会の強い要望で公表された。占領終結ぎりぎりまで放射線の被害を隠

とした米国の本音が見え隠れする」と分析する。

占領期、連合軍軍総司令部(GHQ)がプレスコード(メディアを対象とした報道規則)を発令し、

この間、周囲の理解は当然ではなかった。「原爆がら病」と呼ばれた後遺症によって、倦怠(けんたい)感に襲われた被爆者が怠

け者扱いされたり、やけど痕が盛り上がるケロイドが感染するとい

ううわさが流れたりした。高橋氏は「特に被爆者が移住した場合、広島や長崎にいた時のようには理解されず、差別や偏見にさらされた人は多かったはず」とみる。

(高田未来)



原爆の人体への影響を調べるために設置された原爆傷害調査委員会(ABC)。治療せずに検査だけを行い、被爆者から「人体実験」などと批判の声が上がった—1950年、広島市の比治山(ABC後身の放射線影響研究所提供)

えひめ  
戦後70年